
刃と炎

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刃と炎

【Nコード】

N03100

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

ある日、妹紅はふと思い立ち、冥界に足を踏み入れた。少し前に自分を倒した者をこの手で倒し、自分の誇りを取り戻す為に。

（前書き）

前書き

この話は、藤原 妹紅と魂魄 妖夢の二人が、緋想天をイメージした戦いを繰り広げます。

しかし、作者はそこまで戦闘描写が得意ではありませんので、それはご了承ください。

そして、原作の設定もあくまでWIKI程度ですので、色々とおかしいと思う所もあると思います。

まあ暖かい目で見てください。ではどうぞ。

ここは迷いの竹林と呼ばれる場所。そこに住んでいる藤原 妹紅は、今の日々に満足しながら過ごしていた・・・はずであった。

しかし、今の妹紅には、どうしても晴らさなければならぬ事があった。

そう、あの日、亡霊の姫と半人半霊の人間に負けた時の事であった。自分の力に絶対の自信があったのにも関わらず、妹紅は敗北してしまったあの時の記憶が、妹紅を未だに蝕んでいた。

この雪辱を晴らす為には、再びあの者達に挑む他はない。

そう思い立った妹紅は、握り締めていた拳を空に掲げ、自身に誓いを立てた。

そして、彼女は竹林を後にし、あの者達のいる・・・冥界へと向かっていった。

場所は移って、ここは冥界にある白玉楼へと続く、長い階段の一番下。

そこにいる妖夢は、あまり来る事もない客人を迎える為に、日々見張りに勤めていた。

庭師である以上に、一介の剣士である彼女は、当然剣の稽古も欠かさなかった。

ただ見張りをしているも時間の無駄であると思った彼女は、その場を離れず剣の稽古を始めた。

彼女にとってはその稽古であっても、周囲から見れば、美しく優美な物であった。

彼女がしばらく剣の舞を続けていると、少し遠くから、彼女に語りかける声がしてきた。

「へえ、綺麗な物だね。こんなに綺麗な舞は、中々お目にかかれな
いよ。」

皮肉めいた口調と声色で語りかけてきたのは、悠然と妖夢の方に歩
いてくる妹紅であつた。

妖夢がその声を聞くと、舞を止め、妹紅の方を真つ直ぐに見た。
その後、少し疲れた様子で、妖夢が妹紅に言葉を返した。

「いえ、私の舞など、幽々子様の舞には到底及びませんよ。」

自身の剣舞を、舞と認めるその姿勢に、妹紅は興味深そうな笑顔を
妖夢に向けた。

その後で、妹紅は軽く笑いながら、妖夢に言い放つた

「ははは、そうか。まあ確かにそうかもしれないね。でもその舞は、
魅せる為の舞じゃなくて、戦う為の舞だろう？」

妹紅の問いに対して、妖夢は当然と言わんばかりに言った。

「もちろんですよ。私の舞は、見た者を魅了する為の物ではありません。
せん。そう・・・戦う相手を魅了する為の物とでもいいましょうか。」

自信のこもった台詞に、妹紅は強気に答えた。

「そうか。じゃあ今から私に・・・その舞を見せてもらおうか。」

妹紅は自身の周りに炎を纏わせ、妖夢に挑発してきた。
しかし妖夢自体は、あくまで冷静にその理由を尋ねた。

「なぜですか？私は今、あなたに舞を見せる理由がありません。残念ですが、私の舞は理由もなく見せられる程安い物ではありませんので。」

妖夢が丁重にそう言うと、妹紅が自身の怒りをあらわにして、怒声を出した。

「理由がないだって？そっちに理由がなくても・・・こっちには大有りなんだ！！」

妹紅の本気の意味を込めた思いは、冷静に返していた妖夢に届いたようである。

「・・・そうですか。それならば、あなたに見せて差し上げましょうか・・・私の舞を！！」

両の手に楼観剣と白楼剣を構え、妹紅の思いに応えた。そして、二人の戦いの幕が、その時切つて落とされた。

「でやああああ！！！！」

妖夢が先手として妹紅のすぐ傍まで飛び込み、目にも止まらぬ一閃を放った。

あまりの速度に妹紅が両断されたかと思つたが、妹紅は既に妖夢の真上へと跳躍していた。

「そんな直線的な攻撃・・・当たらないよ！！」

妹紅はそのまま落下しながら、妖夢目掛けて炎の鉄拳を見舞った。

妖夢はぎりぎりですれをかわし、鉄拳は地面に直撃した。
鉄拳が当たった所から地面が割れ、炎と石の礫が辺りに飛び散った。
これには、さすがの妖夢も避けるのが厳しかった。

「くっ!!」

飛んでくる攻撃を剣である程度防ぎ、攻撃が止んだ後で、妹紅のいる方を見た。

妹紅は地面にぶつけた拳をゆっくりと引き上げ、同じように妖夢を見た。

炎を再びその拳に宿し、妹紅が言い放った。

「どうした？一人じゃやはり無理か？半人半霊の剣士!!」

その言葉を聞き、妖夢は妹紅が戦う本当の理由と・・・その強き意思の力の理由を、完全に理解した。

それを踏まえた上で、妖夢が妹紅に言い返した。

「そうですね・・・今のあなたに正面切って挑むのは、私では無謀な事でしょう・・・ならば・・・」

そついい終えると、妖夢が妹紅の視界から突如消え去った。

「!？」

妹紅が戸惑い、周りをうろつくと見ている内に、ほぼ対称的になつて妹紅に切りかかってくる二人の妖夢がいた。

「しまっ・・・」

妹紅が避けようとする間もなく、二人の妖夢が妹紅を切り刻んでいた。

「ぐう！！」

妖夢の二重の攻撃の前に、さすがの妹紅もひるんだ。

ひざを折り、目の前にいる方の妖夢を見据えた。

そんな状態の妹紅に、妖夢が声を重ねるように語りかけてきた。

「いくらあなたが圧倒的な力で来ようとも、私達二人が圧倒的スピードで斬り続ければ、さすがのあなたも手の出しようがないでしょう。では、参りますよ！！」

そう言い残すと、二人の妖夢はまたもや妹紅の視界から消えてしまった。いや、見えない程のスピードで妹紅の周りを動き回っているのだ。

妹紅はどうにか妖夢を捉えようとしたが、到底捉え切れそうになかった。

圧倒的スピードから繰り出される、嵐のような剣撃の雨。妹紅は避ける事も出来ず、その雨を受け続けた。

しかし、そんな最中でも妹紅の表情には余裕があった。自分が明らかに不利な状況であるにも関わらず、妹紅はあくまでも余裕を保っていた。

それが妖夢にとっては、不思議である以上に焦りを募らせていた。まるで自分の攻撃がまったく効いていないのかと錯覚に陥る程の妹紅の余裕ぶりに、妖夢がとうとう痺れを切らしてきた。

「……あくまでも余裕を見せますか……いいでしょう、次で終わりにさせてもらいます！！」

そう言い放つと、二人の妖夢が一つとなり、大げさな居合い切りの構えを見せた。

「人符・・・現世斬！！」

恐らくは今までで最速の剣が、棒立ち状態の妹紅を襲った。

妖夢の剣は、確かに妹紅を捉えた。しかし、現世斬は敵を切り抜けるスペルカードであるはずの技なのに、妖夢は妹紅に切りかかったまま立ち止まってしまっていた。

そう、妹紅は自分の身を切らせて、妖夢の動きを止めたのである。

これにはさすがの妖夢もどうにもならなかった。

しかし、それを成す為とはいえ、妹紅の体はもう戦える様子では明らかになかった。

近くにいる状態の妖夢にも、それぐらいはわかっていたようであった。

「なるほど・・・しかし、その体でどうやって私を倒す気で・・・」

と言う前に、妹紅が妖夢の腕をがしつと掴んできた。

そして、妹紅の全身から、これまでで一番の炎が出てきていた。

「やっと・・・捕まえた・・・これで終わりにしてやるよ・・・フジワラア・・・ヴォルケイノオオオ！！！！」

妹紅のその一声によって、妹紅の体から天にまで届く程の火柱が現れた。

周囲を焼き尽くさんといわんばかりの、灼熱の業火。二人は火柱に呑み込まれ、姿はまったく見えなかった。

火柱が消え、二人の姿が見えると、ぼろぼろになった妖夢が地面に倒れており、全力を出し切った様子の妹紅が立っていた。

「はは・・・これで・・・あたしの勝利・・・」

と言いかける前に、妹紅もまた、その場に倒れこんだ。

勝者なき所に、あの上白沢 慧音が歩いてきた。

倒れている妹紅を見つけた慧音は歩み寄り、意識のない妹紅を抱きかかえた。

「・・・無茶をしたな・・・妹紅・・・」

全てを覚った様子で、妹紅に語りかけると、意識を失っていたはずの妹紅が返事をしてきた。

「ははは・・・でも・・・勝ったよ・・・慧音・・・」

妹紅の弱りきった声に、さしもの慧音も心配そうな声で皮肉を言った。

「・・・この有様で、よく勝っただなんて言う・・・」

その一言に、妹紅は残念そうな調子で返した。

「でも・・・勝ちも勝・・・」

と言いかける前に、また意識を失ってしまった。

それと同じぐらいのタイミングで、白玉楼に続く階段から、あの西行寺 幽々子がゆっくりと降りてきた。

降りてきた後で、幽々子は倒れている妖夢に駆け寄った。

妖夢が気絶しているのを確認してから、幽々子が妹紅の方を見て話しかけてきた。

「・・・どうやら、その子が妖夢と戦ったようね・・・この様子だったら、妖夢が負けちゃったのかしらね・・・」

戦いを最初から見ていた訳ではなく、この様子から幽々子が察してきた。

「仕方ないわね・・・あなたが、私の相手にでもなる？」

幽々子が慧音にそう言つと、慧音は目を閉じて首を横に振つた後、幽々子に言い放つた。

「いや、私はここに戦いに来たんじゃないんだ。ただ、妹紅を探してただけだ。」

と率直に言つと、幽々子はわかつたと言つた様子で、慧音に返した。

「そう・・・じゃあ、その子はしっかりと送つてあげてね・・・」

笑顔向け、慧音に手を振つた。

「ああ、そうするよ。」

慧音も手を振つて返し、妹紅をおんぶしたまま、その場を後にした。

「・・・ん？」

妹紅に意識が戻ると、そこは慧音の背中の中であつた。

慧音は妹紅をおんぶしたまま冥界を出て行き、今こうして夕日が差す森の中を歩いていたのだ。

妹紅はこの状況があまり整理できない状態であったが、慧音の背中の中で、ある事だけは心に決めた。

そう、次はあの亡霊の姫に挑んでやる。と言う誓いであった。

妹紅はその誓いを自らに立てると、安心したのかそのまま眠りにはいつてしまったのであったとき。

（後書き）

刃と炎 F I N

後書き

どうですかみなさん、お楽しみいただけただけでしょうか。

わしはこういった本格的なバトルは初めてなので、手探り状態で話を書き上げました。

個人的には気に入っているつもりですので、共感できる所とかあったらこれ幸いです。

スペシャルサンクス

藤原 妹紅 様

魂魄 妖夢 様

上白沢 慧音 様

西行寺 幽々子 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございました。

b y 澄田 康美

P S、妹紅 V S 幽々様は、またの機会にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0310o/>

刃と炎

2010年10月28日04時10分発行